

幼児と共に五十年(2)

——両親教育をめぐる——

齋藤芳子

考えてみれば、幼児が幼稚園にいるのは僅

か四時間に過ぎず、二十時間は家族と一緒にある。幼児教育とは、両親や家族と共に、心を揃えて勉強していくべきものに他ならない。私は、長年そう考えて両親教育に力を注いできた。そのことをめぐって、私のやり方を述べてみよう。

幼児を見る目を育てる

P・T・A活動において、最も大切なのは、幼児を見る目を育てるための勉強会ではないだろうか。一年に一度、行事として有名講師を招く講演会ではなく、もっと身近に、継続的な勉強を積み重ねていくことが大切だと考えた。そこで、園長や教師によるP・T

・Aの園内研修会をくり返し、さらに、会員中の有能な人材を発掘して相互研究を試みた。私の園で実施していた両親教育の年間計画のうち、主なものを引いて説明してみよう。

(1) 「入園前保護者会」

幼稚園では入園前保護者会を開いて、幼稚園の歴史と保育の実際について話し、遊んで学んでいる幼児の姿の理解を求め、

行事などの時、同年齢集団の中のこともの遊び方、自立性、自発性、を観察してもらって自分のこともの自己評価してもらおう。

その後一時間位、お話と質問の会をして、両親教育の助けをしている。

(2) 「母の日」

幼児は、神より託された生命ある芸術品として、心をつくし、想いをつくして、一生懸命に育てあげ、よき成人として社会に送り出して欲しい。

幼児の入園と共に、P・T・Aに入会して、幼児の発達や心理、成長を勉強して、幼児教育に協力して欲しい。

幼児との関わり方や遊び方の中に、教育的配慮をし深い観察をして、子育ての深い喜びと生きがいを味わって欲しい。

そして何時までも、「お母さん ありがとう」と感謝され、尊敬される母として子どもと共に成長しようと呼びかける。

(3) 「父の日」

お父さんをお招きして、幼児の遊び方など保育参観の後、父と子の遊びの時間を持ってもらう。

お父さんへのお話として「教育の事は母親にまかせております」とのご挨拶はよくきく。社会のきびしい職務は理解出来るが「家庭のかなめ」として、家族の教育、躰にも意見をもち、家族の教育の相談相手になった

り、教育の指示が出来るように、幼児教育についても勉強してほしい。

子どもだけは、人にまかせず、話を聞いてやったり、一日一回は心のふれ合う時間を共有してほしい。

P・T・Aに出席出来なくても、放送、新聞などの教育、躰の番組などを選んで見るなら、相当の知識・教養は習得出来る。定年になっても「お父さん ご苦労さま」といたわってくれるような、心暖かい成人に巣立つよう、心を通わせて育てて下さいと望む。

(4) 「敬老の日」

祖父母を招いて、保育を見せよう。

集団の中の自主的・自発的な孫の活動と能力を知ってもらってとかく過保護になりやすい老人にお話をする。

園児の祖父母はまだ若いのだから「敬老」に甘んじないで、「老人育ちは三文やすい」

などといわれないように、勉強しようと約束し合う。今日見た孫の自立能力を信じて「気をつけよ、手をつけるな」の教育方針で、忙しい父母の子育ての助人になって欲しい。

絵本を読んできかせたり、童話を話してやったり、一緒に遊んでもらえば、幼児の情操教育・言語発達、心の安定のために、大切な教育協力者である。

現代の教育法、躰などもろもろの社会を勉強しながら、孫と共に成長し、孫からも話し相手として頼られるような、心豊かな老人でいてほしいと励ます。

以上のように、様々に幼児について勉強する機会を設けてきたが、何よりも重視したのは、実際に遊ぶ姿をよく見て貰って、その後で話し合うということであった。家族みんなが、幼児について共通の理解を持つこと、幼児も仲間に入れて家庭内の話し合いを試みる

ことなど、家庭生活を豊かにしていく上で要となることではないかと思う。

私が、特に関心を持ってきた「ことば」の問題にしても、根本は家庭にある。特に、三十年後の調査で、昔よりも幼児語や幼児発音が多かったのは、家庭内の人的環境の影響としか考えられないように思う。T・Vやラジオ、きれいな絵本など、物質的環境がこんなにも豊かになっているのに、子どもたちは、どこかで飢えているのではないだろうか。

幼児は、常に心一杯の感動を言い現わそうとして、乏しい語いを探しながら、しどろもどろと懸命に努力しているものである。しかし、そんな幼児に心くばりが届かず、心の感動を表わす力を養おうと、彼らの内面を見つめてみる機会が余りにも乏しいように思う。彼らの表現をゆっくりと受けとめ、耳を傾けてやること、一つ一つを大切に聞きとってや

ること、歌ったり踊ったり、はね廻ったり絵を描いたり、それらはすべて子どもの「ことば」であると考えることなど、当り前のことながら、その当り前のことがすべておろそかにされすぎているのではないかと思う。

言語生活が発達しているように見えながら、何となく上すべりであるのも、家庭内での人と人のかかわりの薄さ、それがとかく表面的・上すべりに流れていることの現われかも知れず、また、それは、家族だけを責めるべきことでもなくて、社会全体の問題かも知れないだろうと、ことの重大さに愕然とさせられる。しかし、幼児たちの活発さと生命力に励まされて、何とか頑張ろうと明日の力が湧いてくるものである。両親たちに何よりも望みたいのは、「子どもと一緒に力を合わせてがんばってみる」という、そのことであるように思われる。